



Data

監督：ジョン・クラシンスキー
出演：エミリー・ブラント／ジョン・クラシンスキー／ミリスント・シモンズ／ノア・ジュブ／ケイド・ウッドワード

■■■ショートコメント■■■

◆「音を立てたら、即死。」本作のチラシにはそんな言葉が躍り、何度も観た予告編ではその緊張感でいっぱい！しかも、2人の子供を守る母親・エヴリンを演じるのはエミリー・ブラントだ。さらに、チラシでは「全米 No.1 大ヒット！米映評サイトレビュー『IT/イット “それ” が見えたら、終り』超え！」、「全米 “沈黙” 2018年 No.1 大ヒットホラー！！」と宣伝されているから、こりゃ必見！

◆「音を立てたら、即死。」の“意味”は、荒廃してしまった地球上のどこかを、妻と3人の子供を連れて逃げ回っている冒頭のリー（ジョン・クラシンスキー）たちの姿を見ればよくわかる。一番下の男の子がおもちゃを作動させて大きな音を立てると、“音に反応し、人間を襲う「何か」”が反応し、あっという間にその子を襲ったからビックリ！この化け物は一体ナニ？地球は一体どうなっているの？生き残った人間はいるの？

そんな世界の中、リーたちは今どうやって生き、どうやってあの化け物から逃げ回っているの？

◆本作では、そんな状況説明や理由の説明は一切なし。ただ、手話を交わしながらその日その日を生き延びているリーたち家族の姿を映し出していく。

他方、リーは研究室のような部屋をもち、そこで何かを研究中。娘にはイヤホンを持たせているが、その目的は一体ナニ？「音を立てたら、即死。」だが、あの化け物はどうも川の音や風の音そして滝の音など、自然の音には反応しないらしい。すると、「那智の滝」のような大きな音のする所に行けば、いくら大声で叫んでも大丈夫。

本作にはそんなシーンも登場するので、もしあなたが本作のような状況下になったら、家族を守るため如何に対処すべきか、何を研究すべきかをじっくり考えてみるのも一興だ。

◆本作の途中でわかったのは、エヴリンが妊娠していること。しかし、病院はもちろん、助産婦もいない中、エヴリンはどややって赤ちゃんを産むの？さらに、生まれてきた赤ん坊が、“おぎゃおぎゃ”と泣くのは当然。すると、防音室でも作らない限り、あの化け物が赤ん坊の泣き声に反応し、たちまち母子は殺されてしまうのでは？

本作中盤は、そんな恐怖の中、化け物を見つめながら声を上げるのを抑え、1人でバスタブの中で赤ん坊を産み落とすエヴリンの姿が（部分的に）描かれるので、それに注目！他方、リーの方は食料の調達等の仕事があるから、外出するのは仕方なし。さらに、化け物を誘導するべく、男の子に花火を打ち上げさせる等、その戦略、戦術は多彩だ。そんな努力の甲斐あって、エヴリンは無事男の子を産み落としたが・・・。

◆アイデア勝負の映画は多い。『IT/イット “それ”が見えたら、終わり』は子供が消える町に現れる「それ」を描くホラー映画だったが、本作はその「超え！」を狙うもの。劇場内は約8割の入りで、その多くは若者だった。上映前の若者たちのおしゃべりは結構賑やかだったし、上映中もスクリーン上では「音を立てたら、即死。」だが、座席ではポップコーンを囓む音がチラホラ。そのお行儀の悪さにはうんざりだが、こりゃもはや如何ともしがたいもの。

また、本作導入部ではエヴリン達がすべて手話を使い、小声で喋るのさえ我慢していたから、観客もそれに協力していたが、途中から川の音、滝の音そして化け物の登場シーンに効果音が使われてくると、しだいに観客の緊張も普通の映画並みに・・・。また、本作ではエヴリンが無事に赤ん坊を生んだ後は急速にストーリー性が稀薄になっていくが、それを補うかのように本作のクライマックスでは、リーと化け物との“対決”が登場するので、それに注目！もっとも、せっかくここまで逃げ回っていたのに、なぜここで“対決”しなければならないの？その理由説明もないため、この状況設定にはいささか違和感がある。しかし、その結末は？

◆もっとも、リーと化け物との“対決”は本作のホントの結末ではなく、ホントの結末はそれとは別にきちんと用意されている。しかも、それはストーリーの展開中にヒントが示されているので、その内容は想定内だ。リーの研究室では周波数関連の研究が多い。また、そこには、“必ず何か弱点があるはず”のスローガン(?)が掲げられていたから、頭のいい長女はギリギリの危機の時点でそれに気づいたらしい。そこで、勇気を出してそれを実行してみると・・・。

本作を90分にまとめたのはさすがだし、「音を立てたら、即死。」という設定のアイデアは秀逸。また、エミリー・ブランドとジョン・クラシンスキーの演技や子供たちの演技も立派なものだ。しかし、後半からのストーリー展開は読めてくるから、当初の緊張感

薄れ気味になる。まあ、よくできてはいるのだが・・・。

2018 (平成30) 年10月24日記